1-1自分への問い

ガラスとの出会い

28年前から私はガラスを使って造形するようになった。当時私は大学生としてデザイン科で学んでいたが、無性に手を使い実素材に触れて、何かを作りたかった。そして興味を持ったガラスを知りたくなり、仲間とともに吹きガラス工房を訪ねて回った。

溶解炉の中で溶けている白熱色のガラスを見ているだけで気持ちは昂り、夢中になって鉄のパイプにガラスを巻きつけていた。溶けたガラスを自由に扱うには、高度な技術とそれを得るための経験が必要だった。長いパイプの先にある熱い液体を特殊な道具で操りながら、息を吹き込み、重力に抗っていく。基礎訓練を受けていない私には、途方に暮れることがほとんどで、作りたいものを作れることは一度もなかった。

夏休みを使って、石川県能登島のガラス工房へ二週間泊まり込みでトレーニングをした。

ある程度経験を積むにつれ、単純な形だがタンブラーやボウルのようなものが作れるようになっていった。しかしそれらは作りたい形や大きさ、色ではなかった。その時は、自分の技術が伴わないからだと思っていたが、ある日ガラスアーティストの作品を見ていて気がついた。吹きガラス技法を使っている作品は、美しいと思い感動するが、それを作ってみよう、真似てみようという気持ちを感じなかった。強く感じたのは、制作プロセスへの謎解きのような疑問で、不思議なものを見ているときの感情に似ていた。

操る楽しさ

そして、私は大学で助手として働くことになり、大学の設備を使うことができるようになった。ガラスを自分のいる場所で作りたいと思い、様々な方法を探ったところ、電気炉を持つ教授の協力を得られることになり、キルンワークを始めることになった。

ガラス研究用の電気炉と、金工工房にあるロストワックス用の電気炉を使用しながら、ガラスを自分で溶かし始めた。私は、熔かすガラスを入手する方法を知らなかった。そこで、窓ガラスの端材を、近所のサッシ屋さんに分けてもらい使っていた。ガラスであれば最初はなんでもよかったのだ。主に使う電気炉には、ダイヤル式の温度調節と練らしタイマーがついていた。そのため、ガラスを加熱し始めてから溶けるまでの間、メモを取りながら確認していく作業をした。この作業の中で、私は吹きガラスに夢中になった時と同じ気持ちの昂りを覚え、電気炉を操ることの楽しさに没頭した。

ガラスを熱で溶かすことに熱中した。

何を作るかよりガラスを操りたい思いが強かった。ガラスという素材に強い魅力を感じていたのだ。そしてガラスに触れ、操りながら得られる経験を望んでいた。

そして、自然と一つの問いを持つことになる。

コンプレックス

何かを表現する時、表現したいことに合わせて形や大きさ、そして素材が選択されると思っていた。しかし、私がガラスを使って何かを作る時、まずガラスを触っていた。ガラスで何が作れるのか、美しいガラスとはどんなものか、見たこともないガラスを見てみたい、そう思っていた。

しかし、この考え方が私には強いコンプレックスとなった。なぜなら、素材は表現したいことに合わせて選択されるべきものだと考えていたからだ。まずテーマがあり、それを実現するために最適な素材を探し、最適な技法で作っていくことが良いプロセスだと信じていた。

おそらく、そのような思考を持ったのは、私がデザインを学んでいたからだと思う。デザインの世界は、あらゆるカテゴリーに存在する。そしてコンセプトやアイデアに合わせて素材を選択して具現化していくプロセスを踏んでいく。それがいいものを作るセオリーだと思っていた。この考え方で素材を選択した時、その素材が使われる部分には、すでにその素材の特性を活かす役割を与えられている。適した素材がなければ、新しい素材を開発することもある。

私は何かを表現する時、ガラスを使うことを望んだ。そして、この考え方にジレンマを抱えたまま作ってきた。

それまでのガラス制作は、造形物とクラフトを並行して制作していた。そして自宅に工房を構え、その場で作れるものを作っていた。自宅の工房では、電気炉といくつかのコールドワーク加工機を用いて制作をしていた。ガラスを独力で制作することを強く望んでいたため、場所と道具を求めて、その中で技術を学び、技法を探していくことになった。基本的には自分で持てる機材と場所という基準があり、そこで制作できるものはどのようなものなのかを探る毎日だった。

キルンワークが主体となって、ガラスを溶かして成形することで作品を生み出すことになった。コールドワークに使う設備はハンドツールとベルトサンダーのみだった。

手探りで作り始め、とにかく作る日々だった。そして、それらを販売して生計を立てようとしていた。

教育機関でガラス造形を学んでいない私には、師匠や恩師、よりどころがないままにとにかく制作することが目的で、考えていたことは、「ガラスで何が作れるのか」「この場所で何が作れるのか」「どんな作り方があるのか」だった。

制作が楽しくて仕方なかったためか、同じようなものを大量に作っていた。

技法は板ガラスを用いたキルンワーク技法「フュージング」が主で、個展やグループ展を中心にクラフト作品を、コンペなどには造形物を出品していた。

なぜガラスで作るのか

そして、作りながら一番感じていたことは、「作品に感情移入できない」「作るプロセスは面白いが出来上がった作品に興味が湧かない」というマイナスイメージだった。

作り方には限界があり、工房の設備にも限界があった。それらの限界を感じ始めて、自由にガラスで造形できない感覚が次第に大きくなっていた。

自分の制作しているものが、思うようにならない、それ以前に思うことさえうまくできないようになっていることに気が付いたのは、作品を展示しても売り上げが上がらず、コンペにも入選しない日々が続く中で、海外では私の想像を超えた作品が次々と発表されていることを知った時だった。

そして、もう一度最初から、作る前の興味あることに立ち戻り、やりたいことを見つめることにした。素材と環境と情報をリセットしようと思った。私は自分の制作を変革したいと考えている。作品だけではなく、作品を作るための思考過程と環境、すべてがこの変革に関わっているのではないかと考えている。

今までの思考と経験を問いに照らし合わせ、それらを客観的に、否定的に考えるようにした。そのためのリセットである。

そして本学で自己作品制作について研究を始めた。まず環境を変えたのだ。大学院では学生として指導を受け、新しい情報と気付きを得た。

また、フュージング技法について入門者向けの技法書をまとめる機会を得て、自分が考えてきた殆ど全ての制作プロセス、技法をまとめて出版した。それまでは、作ってきたプロセスや技法は、私の作品の特徴そのものだと考え、公開を避けてきた。これらが一般的になることに特徴を消失させる弊害があるのではないかと考えていたためである。しかしこの考え方自体が思考の拡大を妨げてきた要因であり、これをきっかけに技法の呪縛から抜け出すきっかけとなった。技法以外の部分に特徴を見つけなければならなくなり、技法由来の表現よりも造形したいもののイメージを優先する思考プロセスを踏むことが多くなっていったのである。

また、材料を見直し板ガラスで制作することから離れることにした。技法由来の表現と同じように、材料由来の表現からも自身を切り離そうと考えたのだ。

大学院では、ガラスを触らなければならないという縛りはなく、自分のテーマを中心に活動していった。ガラスを使わず作品を制作することも可能だった。共通工房と呼ばれる金属加工や木工の工房を自由に使用でき、自主的な制作に対応する環境も整っていた。

しかし、私はガラスで何かを作ろうと考えた。

ガラスで作ることができないもの、ガラスではまだ存在していないものに興味を持っていても、それを私はガラスで作ることを考えた。むしろ、そういった既存ではないガラスについて考えることを楽しんでいた。

ガラスは私にとって他のどの素材よりも容易扱えるものだと思う。だからガラスを使おうとするのか？それは相対的に考えただけであり、ガラスで作ることができるものを作っていただけである。

ガラスで作ることができないと思うものまで、作りたいと思う理由はなんだろう。ガラスに何を期待しているのだろう、何を望んでいるのだろう、という疑問が浮かんできた。

そして「なぜ私はガラスでつくるのか」という問いが、残った。

しかし、この問いが見えてくるまでは、様々な実践経験が必要だった。

まず、過去の自己作品を振り返り、何を目的としていたのかを探った。それは表現テーマ、技法、制作した時の背景も含めて見つめていった。

また、同じガラス素材でも、違う技法による制作アプローチを思索してすすめ、ガラスから得られる情報を増やしていくことにした。

考えていくこと、考えを整理することを学ぶため、美術教育学分野に興味を持ち、授業に参加した。教育については、私自身が教育者、そして伝達者としての立場を持っていた。教えるときに考えを整理する重要性を経験として知っていたのだ。

そして、環境を大きく変えるためにオーストラリアへ留学し、異文化での制作と生活する時間を得たり、ワークショップやアーティストインレジデンスなどに積極的に参加しながら、制作の実践と整理を行った。

そうしていくつかのキーワードが生まれ、それをもとにさらに興味の根元を見つめていく時間を費やした。

キーワードは「迷い」「気配」「動き」「静止」「生と死」「瞬間」「受け止める」「型」「矛盾」などである。